

試練と誘惑

ヨブ記1：6～12 マルコ1：12～13

明日5月18日は海老名教会の創立記念日です。今年で43年目となります。40年という歳月はすでに少なくとも一世代は過ぎた長さであります。創立当初の幻を共に見てこの地で伝道を始めた信徒の方も少なくなったことでしょう。私はこのおよそ40年の経過ということで、今から35年前今と同じ時期のヴァイツゼッカーの講演——「荒れ野の40年」と後に名づけられた——を改めて聞いてみました。正確には1985年5月8日です。これは向こうでの終戦記念日になります。(ドイツは日本より3か月ほど先に降伏していますので)。戦後40年を旧約のイスラエルの民が出エジプトをしてからの彷徨と重ねた名演説です。過去に目をつむる者は現在においても盲目になるなどの名言がありますが、また過去の負の遺産をたとえ世代が変わったとしても今を生きている個人の責任として心に刻みになっていくという真摯な姿勢にも心が打たれます。私どもの教会においても、今一度先達たちが共有した幻を想起し、今までに経験してきたものを正も負も、前の人たちがやったことだからではなく今の私たちが自分の担うべき責任としたいと思いました。また演説の中で大統領はしばしば和解という言葉を使いましたが、これはしばしば神と人が和解をする(カール・バルトの『和解論』にもつかわれている)ことに用いられる言葉です。本来なら罪を犯し背いた人間の方から、神さまに対して謝罪して歩み寄りなければならないのに、神さまも方が先に和解の道を開いてくださったのです。御子を遣わして。それに学とすれば、もし和解すべき問題があるなら、神様が先に歩み寄ってくださったように、こちらから歩み寄りたいものです。積極的に過去に向かい合うこと、そしてそれを心の奥深くに刻み付けることにより現在を生きたいのです。40年も経つとその当時の証人は少なくなります。イスラエルの民においても、神の恵みである海の大割れを実体験した人が少なくなっていたに違いありません。

こちらの教会に来てから私はマルコによる福音書を講解していますが、奇しくも今日の聖書箇所はイエス様が荒れ野で40日間サタンから誘惑を受けるところです。40年と40日では数字は同じけれども長さが全然違うではないかと言われるかもしれませんが、イエス様が断食して荒れ野にいた40日はイスラエルの民の出エジプトからの荒野の40年と対照されるのです。イスラエルも神に導かれて荒れ野に出たように、イエス様も霊に導かれて荒れ野に行きました。霊に導かれるということは父なる神様もご了承なのです。もしかしたらヨブに対してのようにイエス様の知らないうちにサタンと神様の打ち合わせがあったのかなど想像もしてみたりします。ヨブについて予め天上で神様とサタンが賭けをしたのを思い出します。しかしヨブはそのようなことは全然知らなかったのです。自分に降りかかる理不尽な不幸に原因が分からないのです。ヨブは見えない相手と、そして思いもつかない神様とサタンの賭けと戦わなければなりません。ヨブに対するサタンの誘惑は信仰の本音を問うのでした。「人が利益もなく神を敬うものか」ということです。利益や幸福の追求のための信仰ではないか試そうというわけです。私どもも何か信仰をもてば辛いことも克服できるし、人生を深く豊かに生きられるのではないかと少しは考えないでしょうか。それに対しヨブは「わたしは神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただくのではないか」と答えます。サタンはそのあと出て来なくなりますが、その後に無理解な友人たちや、この苦しみを問いかけても答えてくれない隠れた神に苦しみます。

このヨブ記における神さまとサタンの賭けのモチーフは、ゲーテのファウストの最初の天上の序曲にも出て来ます。神さまが目をかけていた老碩学に対してメフィストフェレスが、若さ、青春の喜びと引き換えに魂をいただくというかけ引きをすることを天上で神様とします。ファウストにとって取り戻すことができない青春の喜びは何よりも大きな誘惑であったのです。なぜなら彼は若い時分書齋に籠って勉強ばかりしていたものですから青春を謳歌するのを逸してしまったのです。彼はそれをとても悔んでいたのです。そのようなわけで魂を売り渡してしまった彼にサタンは姿を変えて現れ共に歩むこととなります。ファウストは墮落し、それだけでなく彼に係った人たち、また女性も墮落させその家族をも不幸にしていきます。しかし最後には自分が落としてしまった女性の魂によって救われるということになるのです。しかし基本的にこれはその題にあるように悲劇です。その原

因はファウストがサタンの誘惑に負けてしまったからなのです。その敗北が多く悲劇を生んだのです。何よりも自分のあこがれていたもの、それを差し出したサタンの賢さに負けてしまったのです。するとサタンの誘惑と言うのは私どもがそれぞれ一番大切にしているもの、希っているものなどに付け込んでくるのかもしれませんが。人はその強い誘惑に勝てるのでしょうか。

サタンはイエス様にも誘惑を持ちかけました。イエス様が洗礼を受けられた折に、神の子であるという声があったのを確かめるためでしょうか。しかしその必要はあるのでしょうか。40日間の試練というのは、その長さをどのように考えますか。他の宗教でも何かを悟るのには何年も苦行や修業をすることが多くあります。それに比べれば40日というのは短い気もします。しかしイエス様が取ってそのような悟りを開く必要はあるのでしょうか。神の子としての本質を既に持っているものは、そのような試練など必要ないし、神の子であるということも示す必要がないのではないのでしょうか。ではなぜこのようなサタンの誘惑を受けなければならなかったのでしょうか。それはきっと罪ある人間が受けるのと同じようにわざわざ謙ってその誘惑をお受けになったのかもしれませんが。どのような誘惑をお受けになったかはマルコによる福音書には記されていませんが、マタイとルカには記されています。イエス様は断食をしていたので、神の子なら目の前の石をパンに変えて見ろと言うことでした。空腹と言うのは根源的な欲求です。生命にかかわるものです。イスラエルの民が荒野で食べるものがなくなった時、モーセに不満をいったときに神様はマナを与えてくださいました。イエス様はご自身ではいくらでもパンを得ることはできたでしょう。後に5千人にパンを分け与えたりされるのですから。またサタンはお前が神の子なら高い所から飛び降りて見ろというのです。このサタンの言葉で想起するのは、イエス様が十字架に掛かれたときに、神の子なら降りて来て自分を救ってみろという声です。多くの人を救ったのに自分は救えないのかという嘲笑の声です。逆にいえば自分を救って他の人を救えないのはメシヤと言えるのでしょうか。またサタンはこの世の権力を与えるから神ではなく自分を拝めと誘います。私どももこの世の見える権威や宝に目を奪われるようなことがあるかもしれません。イエス様は天上と地上のすべての権威を父から授かっているのです。イエス様は見事にサタンの誘惑を斥けました。サタンはその後表立っては出て来ません。もちろんペテロやユダに対してのかかわりはあったことが記されていますが、このような駆け引きは出て来ません。

サタンの誘惑に対してヨブは一見打ち勝ったようにも見えますがはっきりしない。またファウストはサタンに魂を売ってしまった。しかしイエス様はサタンの誘惑を見事に退けられました。ではわたしどもはどうでしょうか。もしサタンが近づいてきて巧妙に、また強く誘惑したならばそれに勝てるのでしょうか。

私どもキリスト者は主の祈りを唱えます。その後の方に「我らを試みに合わせず悪より救い出したまえ」という句があります。これはイエス様が弟子たちに教えられた祈りの一部です。それをマタイによる福音書で見ますと「わたしたちを誘惑に遭わせず、悪いものから救ってください」と有ります。私は神学生の頃気になっていたのが主の祈りに出てくる「試み」が聖書では「誘惑」になっていることでした。試みというのは試験や試練みたいなもので合格するためのテストみたいな感じがしている一方、誘惑と言うのはずるずると奈落へ引きずられていくニュアンスを感じていました。後で分かったことですがこの言葉は両方の意味があるようです。神さまからのからの試練によってがんばれよというものだったり、悪魔が自分の方へ引き寄せる罠であったりするのです。私どもは一人で悪魔の誘惑に勝てるような強さはないでしょう。私ども人間より悪魔の力は強力ですから。また神様の試練においても一人で鍛えられるというのは難しいでしょう。だからこそ祈りの内でもできることなら誘惑に遭わせないでくださいと願うのです。サタンに対しては勝ち目がないのです。ではどんなことをしても勝てないのでしょうか。そうではありませんサタンの誘惑に勝っているサタンよりずっと強いイエス様が味方になってくだされば勝つことができるのです。また一方神様からの試練においても私共個人では耐えられないかもしれないけれどイエス様が共にいて、そばにいてくださるなら試練を乗り越えることができるでしょう。私たちのイエス様はインマヌエル（神我らと共にいます）であります。サタンはその正体を直接には見ることはできないかもしれません。またイエス様のお姿も目で見ることができないかもしれません。しかし私たちが生きる上で大事な戦いが見えない領域で行われているのです。目には見えないお方が、見えない強い悪の誘惑を斥けてくださ

っていることを信じ感謝することができますように。主に呼びかけ続けるものをほっておかれるお方ではありません。イエス様は近くにおられ、守ってくださるのです。